

氏名： 村野正景

実施国：エルサルバドル

協力活動・調査研究

活動名称

貧困地域開発のための文化遺産観光とそのマネジメント向上に関する研究-エルサルバドル共和国チャルチュアパ市を事例に-

(1) 計画通りに実施されましたか？運営面・経理面での変更点はありましたか？

調査対象地の要請で計画を前倒しして行なった。すなわち、2月～4月に計画していた実地調査を、前年の10月～12月、そして本年8月におこなった。後者では、調査成果報告書（スペイン語）の作成・配布、現地住民との成果・情報の共有、成果にもとづく実践をおこなった。また、経理面に関しては、支援金額にあうよう支出分野を変更した。しかし実際には、航空券代金のみで支援金額をこえている。このほか予算上の制限から、現地での活動期間は計画より短縮された。

(2) 実施の結果（良かった点、反省点を含めて）

活動時期や期間に変更があったとは言え、成果はかなり上がっている。とくに、協力隊の期間やその後も含めて築き上げてきた地元住民との関係性が非常に役に立ち、これまで重要視されながら、誰も行なっていなかった、地元住民の文化遺産に対する意識や考えの収集がかなり幅広くおこなえた。インタビューやアンケートによって、のべ500名以上の意見を聞くことができた。すでに一部の分析結果は、スペイン語と日本語のレポートとして公開している。ここで収集したデータは今後の活動策定に資すると思われる、実施して良かった点と考える。

反省点としては、いまだ集計したデータの分析に時間がかかってしまっている。データ量が予想以上に膨らんでおり、もっと効率的な分析方法を計画時に構築しておくべきであった。



コミュニティからの製品



土器を作成する女性

(3) 異国の参加者同士または本人が相互理解を深めたと確信できた場面は？  
または実施事業に対する一般の反響は？

相互理解を深めたと感じたことは、複数ある。一つは、現地の大学から、現地の学生を実施事業にもっと組み込んでほしいと要請をうけたこと。二つ目には、インタビューなどを大規模におこない、文化遺産に対する市民の意識にある種の刺激を与えたせいか、活動実施者の活動に興味をもつ市民も増え、いままで知らなかった組織や個人が文化遺産活用をともに実施しようと要請してきたこと。三つ目には、学校の教員などからも、授業方法に活かしたいから調査成果を公開してほしいと要請されたこと。こうした様々なレベルの人々から、事業への参加や研究成果の公開を求められることは、こちらの考えや意図と現地のニーズがしっかりと噛み合い、また噛み合うことが理解されたためと考える。

(4) 社会への効果（実施事業がどのように社会に活かせるか、活かしたか）

ここまでの活動の成果は、現地の大学や日本の考古学会で発表した。また成果を現地の観光組織や学校教員に公開した結果、彼/彼女らの観光計画の作り方や学校授業のやり方の修正が実際に行なわれるという効果があった。またインタビューなどと並行しておこなった、古代の伝統技術復活事業では、従来の現地の観光に不足していた地元の工芸品づくりを試みた。結果として、考古学研究によって、失われていた技術の復元を行なうことができ、市民の文化遺産に対する帰属意識や保護意識の向上、新たな観光産業への賛同者の増加、観光と遺跡公園の関係深化が進んだ。また日本の学会発表では、活動実施者の研究・活動に理解を示す研究者があらわれ、とくに日本考古学協会国際班からは、この活動は JICA や大学を含めた、一層の連携方法を見出しうる活動として評価された。